

現代インドにおける宗教間融和の可能性 －NGO活動に着目して－



アジア・アフリカ地域研究研究科 1年

鶴田 星子

インド

2017年1月30日～

2017年2月24日

渡航概要と内容

今回のフィールドワークでは、自身の研究テーマであるインド・マハーラーシュトラ州における宗教紛争を抑止する要因についての調査を行った。インドの暴力については、ヴァルシュネイ（Varshney 2001）によると発生率が高いのは都市であり、暴動を抑止するためにはヒンドゥー、ムスリムなどが交流する多層的な公共生活ネットワークの構築が重要とされている。現代において、このようなネットワークを構築し宗教間融和を実現することは非常に重要な課題となっている。しかし、そのネットワークの形成過程についての記述は明確ではない。また、インドの暴動予防活動としては、警察主導によるコミュニティ・ポリシングが効果を上げている地域があると指摘されている。同時にその成功には住民の意見が組み込まれやすいことが重要であるとされている（油井 2016）。以上の先行研究を踏まえ、多層的ネットワークが形成される背景を、住民主導の活動に焦点を当てて調査することが研究の目的となっている。

昨年8、9月に行った予備調査で、宗教間融和を目指して活動するボランティア団体への聞き取り調査を行い、その中でプネー市に本部を構えるボランティア団体「真理を探究するムスリムの会」と出会った。彼らは、講演会活動やイベント活動を通し宗教間融和を説く一方、異宗教間結婚をした夫婦への支援を行っているボランティア団体である。今回の調査では、彼らが支援している異宗教間結婚の夫婦の実態に着目し、団体へのインタビューのみならず、彼らに支援を受けた夫婦を含む、14組のヒンドゥー・ムスリム夫婦のインタビューを実施し、ヒンドゥーとムスリムがどのように共生社会を築き、どのような問題に直面してきたかを調査した。

渡航を通じて感じたこと

前回の予備調査では、ボランティア団体側の話だけを聞いていたため、実際に支援を受けたヒन्दゥー・ムスリムの夫婦や、支援を受けずに生活している夫婦の実態に不明瞭な部分が多かった。今回は質問票を用意し、夫婦がどのように出会い、生活を営み、子どもを育て、コミュニティーの人々と交流してきたのか、という点について重点的にインタビューを行うことができ、異宗教間結婚の実態を知ることができた。彼らの置かれている状況は時代とともに変化しており、異宗教間結婚への理解が増えつつあると言っても、政治的な動きの中でいまだに多くの問題を孕んでいることが明るみになった。そして彼らから見たボランティア団体の存在意義や求める役割も調査することができたことは非常に有意義であった。

また同時に、都市部の人々が自身の結婚についてどのように考えているか、というアンケート調査をプネー市にて実施した。アンケートに協力してくれた多くの人々が、このアンケート結果に興味を持っているとコメントしてくれ、インド人にとっても結婚観とは非常に興味深いテーマであるのだということを感じた。これまでインドの結婚はお見合いが主流であり、恋愛結婚をした夫婦が家族によって殺されるという「名誉殺人」が起こることがあるなど、インドでは結婚自体が大きな問題となり得る状況であった。それだけに、インドの人々が私の研究テーマに大きな関心を寄せてくれたことに、この国の未来への希望を感じることができた。

異なる宗教の人々が争うことなく暮らしていくことは決して簡単なことではない。しかし、今回調査で出会った夫婦のように、お互いの信仰を尊重し合い、子どもにもどちらの宗教についても学ばせ、自分で宗教を選ばせるということが広まれば、共生社会実現の可能性は広がるのではないだろうか。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の調査を通じて、より深くインド社会について知ることができた。結婚はどの社会でも大きな問題になりうるテーマであるが、インドのように非常に多様性に富む社会において、異なる社会集団間での結婚が実に様々な問題を生み、かつ現在抱えている、という事実について認識を新たにした。そしてこのことは、これまで漠然とした問題意識しかなかった自身の研究テーマについて、思いもよらなかった発見につながった。今後は、異宗教間の結婚が行われた時代背景を、より詳細に文献からも調査し、研究を進めていきたいと考えている。そしてそれらのデータをもとに、博士予備論文（通常の修士論文に該当）を完成させ、さらに博士論文の完成へ向け邁進していきたい。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *交通費
- *宿泊費
- *食費
- *印刷代 など



ムスリムの家



婚姻登記所前



婚姻登記所内



社会活動家の運営する本屋



聖者廟